中日漢語対照研究

――「老若」を中心に――

栾　竹　民

目　次

はじめに
一、問題の提起
二、中国文献に於ける「年寄りと若者」を示す語
三、日本文献に於ける「老若」
四、日本文献に於ける「老若」の形成について
おわりに

はじめに

漢語は早く日本に伝来し、日本語に同化した。しかし、日本語として使用されている漢語は、長い年月を経て本来の中国語と異なる意味が発生し、所謂和化漢語が出現するのみならず、本来の中国語には見えず、日本で造語された和製漢語も多く見られる。その和製漢語の形成の過程、要因等は多岐多様に亘るが、個々の和製漢語を詳細で通時論的に考究することによって、類型的な把握が可能であると思われる。そういう類型を求め、積重ねる上に、初めて和製漢語の全容を体系的に把え得ると考えられる。

本稿では、そのような意図に基づいて『和泉往来』に用いられている「老若」に注目し、その形成の過程、要因等を辿りながら、右の想定を解明してゆく手懸りを模索したい。

一、問題の提起

『和泉往来』は『雲州往来』と比肩する古い往来物である。その資料性については、已に少なからぬ先学の研究によって論述されており、ここで再びに触れるのを省くことにする。『和泉往来』には次のような文が有る。

其ノ講匠者須ヘカラクエラムリウクヲ　擇ニ龍駒一然而シカレトモリヤウケスヘシ量シ計サイカクヲ　才学

於ニ抜萃一不ニ認ニ年薦一於老ラウ若ニ自コトニラノツカラ　以採用一（高野山西南院蔵和泉往来174）

維摩会の講匠を選ぶに際して、年寄りか若者かを問わずに、その才学を重視すべきであるという文脈であろう。文中の「老若」は「年寄りと若者」という対義的な意味を示す二つものが組み合わせられている語と判断される。そのよみとしては、音合符と音よみが付いていることから、字音よみであることがわかる。「老若」はここで漢語として用いられていると見られる。尚、古辞書にも「老若」が二字漢語として収録されている。例えば

老若人事部ラウニヤク（黒川本色葉字類抄中四一オ⑤畳字）

文明本節用集　温故知新書

老若ラウニヤク（454⑦）　老若後屈朦ラウ（243④）

とある。「老若」の両字の呉音、漢音は各々次のようになっている。

法華経単字　長承本蒙求

「オイ」ラウ　キタリ

老(平)ラウ｜羅告(告字・平濁)（27 4 4）　老(上)ラウ菜(平)ライ(マン)斑(平軽)ハン衣(平軽)イ（111）

ナホ
ワカシ
ナシム
若(平)ニヤクヨシヽク　コトクミル(タ)　ナムチ　(ヨシ、シク)　汝者ヽ　汝薬ヽ　(523)

姑(コ)(平)射(ヤ)(去)若(入濁)氷(ヘウ)(平)(141)

図書寮本文鏡秘府論　壮弱(シヤク)(東⑥)

新訂韻鏡

老(皓)外轉第二十五效攝181上聲皓-âu一等舌音清濁

若↓弱(灼)而内轉第三十一開宕攝176入聲藥-iak三等歯音清濁

この「老若」の出自は何処に求められようか。漢語である以上、まず、中国文献を調べるのが近道であろう。

二、中国文献に於ける「年寄りと若者」を示す語

「老若」の出所を求める為に、まず、中国文献を調査することにする。文体による使用上と意味上の異同を明らかにし、また、調査漏れを防ぎ、能率を高める為に、中国文献を、その表現形式、内容によって次のような三つの文章ジャンルに分けて、調べる方が有効であろう。

一、韻文―詩、辞、賦、詞等

二、散文―春秋以前散文、歴史散文、諸子散文、史書、小説、文学批評等

三、漢訳仏典―仏書、経注等

中国文献を右の文章ジャンル別に調べてみた結果、管見に及んだ中国文献からは「老若」の使用例が確認されなかった。これは資料の制約によるかもしれないが、しかし現時点では「老若」は字音よみであるものの、中国語出自の漢語と判定しかねる。

さて、中国文献では、その「老若」の不在によって生じてくる「年寄りと若者」という語に相当する部分の空白が如

何なる語によって補完されているのか。以下、この点について検討してみよう。今回の調査で、次の用例の示すように「老少」、「老弱」、「老小」という三語によって、その空白が補完されていることがわかった。

1、老少同一死（陶淵明詩012 13）

2、百姓老少随車駕涕泣（後漢書11 16③）

3、則不應有老少盛衰憶念往事（大般涅槃経巻ハ649上⑤）

4、老弱哭道路、願聞兵甲休（杜詩74 213 7）

5、君之民老弱轉乎溝壑（孟子8 13 B 12）

6、男女老小失分守者（墨子108 70）

7、老小盲冥諸根不具（楞伽阿跋多羅宝経巻三503下㉑）

中国文献に於ける「老少」、「老弱」、「老小」の使用状況は表一のとおりである。

表一

老小	老弱	老少	考察対象／文献
			韻文
		1	陶淵明詩
	1		全漢詩（三国晋南北朝）
	1	1	杜詩
	1		韓愈歌集
	1		蘇東坡詩集
			散文
	2		孟子
	1		荘子
4	4	1	墨子
	3		管子
	1		荀子
	1		呂氏春秋
1	3	1	後漢書
	1		三国志及裴注
	2		文選
	1		貞観政要
		1	中国随筆
			漢訳佛典
1	1	7	大蔵経
6	24	12	計

表一の示すが如く、今回調査した限りの中国文献に於いては、「老弱」は「老少」「老小」より多用されて、「年寄りと若者」という意味分野の中心的な役割を果していることが指摘できる。但し、『大蔵経』では、「老弱」より「老少」の方が多用されている。

では、何故中国文献には「老若」が見えなかったのか。次にそれについて考えてみる。中国文献から「老若」を見出すことが出来なかったのは「老若」を成す後部要素「若」が日本語のように「ワカシ」という意味を有していないためであると思われる。即ち、後部要素「若」に「ワカシ」という意味が存していないことによって、「年寄りと若者」という対義的な意味を示すのには、「老」と結合出来ないのである。そのため、中国文献には「老若」という語が現れなかったわけである。「若」が「ワカシ」という意味を持っていないことは次に挙げる中国の古辞書に於ける「若」に関する記述から察知される。

若　菜也从艸宰聲𦬊擇菜也从艸右右手也一曰杜若香艸（説文解字）

若　菜也謂取菜羹之也集韵有𤇾字烹也即此字擇菜也正訓擇擇菜引伸之義也若順也如也然也乃也汝也又兼及之詞（例略）

（説文解字注）

若如也順也汝也／草亦姓魯人也又虜三字姓後魏書辞也又杜若香／若口引氏後改為寇氏而灼切十一　若蜀地名出巴中／記人賒切又惹弱二音二（広韻）

若𦬊𦬊日灼切説文擇菜也从艸右右手也一曰杜若香草一曰順也如也汝也一曰語辞古作𦬊𦬊若又人耆切蜀　地名又爾者切艸乾也一曰若若綏垂児一曰今人謂弱為若文三重音二（類篇）

若艸乾也一曰若若綏垂児一曰今人謂弱為若亦姓（集韻）

若［説文］若擇菜也又［玉篇］杜若香草又順也［詩小雅］會孫是若又汝也又如也乃也又語辞［疏］若者不定之辞也［注］若者豫及之辞也又若々垂貌［注］若海神又歳名又若木又水名又姓又［広韻］人者切音惹乾草也又般若梵語謂智慧也

（例略）（康熙字典）

右に挙げた中国の古辞書に於ける「若」の記述を見れば、気づかれるように、いずれも「ワカシ」という意味が記述さ

れていない。中国文献には「老若」が形成されなかったのがほかでもなくその後部要素「若」に起因することを右の古辞書の記述からも伺うことが出来る。

右の考察で明らかになったように、「老若」は中国文献には認められなかった。以下、日本文献に目を向けて、「老若」が日本文献に如何に反映されているのか、何時代に登場してきたのか、またその形成の過程、要因が如何なるものか等の問題を巡って検討を施してみたい。

三、日本文献に於ける「老若」

先に見たように、中国文献からは「老若」を検出することが出来なかった。因って、「老若」は中国語出自の漢語でないことが明らかになり得たかと思う。次に日本文献に於ける「老若」の使用状況を見よう。それに先立って、まず日本文献をその表現形式、内容に基づいて分類する方が有効である。そこで、日本文献は次のような文章ジャンルに分つことが出来る。(1)

一、仮名文―(1)物語、日記、随筆(2)和歌集

二、漢文　―(3)漢詩文(4)公卿日記(5)古文書、古往来(6)法令、史書(7)伝記、往生伝の類

三、和漢混淆文―(8)説話集(9)軍記物(10)紀行文の類

右の分類に従って、日本文献を調べてみたところ、「老若」の使用例が確認された文章ジャンルは漢文と和漢混淆文との二つのみである。管見に入った仮名文からは「老若」を見出すことが出来なかった。日本文献に於いては、「老若」は文章ジャンルによって使用上の差異が存していることが察せられる。

尚、今回調査した資料では、「老若」の初出例は次に挙げる『平安遺文二』に現れている十世紀末期ごろの用例となっていると思われる。

然而又可爲寺家長吏仍故大師一室弟子中、不求老若、以吏袴堪(乾カ)者可爲長吏也者、仍撰定附属忠印大法師既畢、(平安遺文二天元三(980)年456上⑮)

文の場面としては、前出の『和泉往来』のそれと似通って、僧侶の間に行われる選抜をいうものである。『和泉往来』の方では、維摩会の講匠を擇ぶには「老若」を不認、右の例では、長吏を擇ぶには「老若」を不求。文中の「老若」は『和泉往来』のそれと同様、「年寄りと若者」という対義的な意味を表わすと考えられる。亦、両者とも「老若」が僧侶と共起して用いられているのである。『和泉往来』の「老若」は右の『平安遺文二』に於ける「老若」を踏襲したものではないかと見られる。

尚、「老若」が見えなかった漢詩文を除いた、今回調査した漢文では「老若」が次の表二のように使用されている。表二の示すように、日本で造語された「老若」は平安鎌倉両時代を通じても、その使用の度合は決して高いと言えないのである。

表二

老若	考察対象／文献
1	平安遺文
1	鎌倉遺文(1-10)
2	大日本古文書 東南院文書(1—8)
3	明月記
1	康富記
1	和泉往来
1	十二月消息
1	鎌倉往来
11	計

今回の調査で、「老若」は十世紀末期頃登場してきたことが明らかになった。では、十世紀以前には、「老若」の示す

概念部分を負うものは如何なる語によって担当されているのか。次に用例を挙げながら検討してみる。

1、啼泣而死老少竊相謂曰是燒佛像之罪矣（日本書紀巻廿115⑤）

2、仍男女老少（風土記110⑥）

3、年雖二老少一。情状難レ原（ユルシ）（律令23②）

4、百姓男女老少（三代實録貞観ハ（866）年197⑯）

5、貴賤老少相傳（古語拾遺序192②）

右の例のように、十世紀以前には「老少」という語によって「老若」の担当するものが分担されていることが分る。加えて、十世紀以後「老若」が現れていても、漢文という文章ジャンルに於ける「老少」は依然として多用されて、その使用状が次の表三のとおりである。

表三

老少	考察対象／文献
2	今集解
2	律令
2	三代實録
2	類聚三代格
2	政事要略
2	本朝世紀
2	朝野群載
4	日本紀略
8	扶桑略紀
1	百錬抄
2	西宮記
5	平安遺文
12	鎌倉遺文(1-10)
1	左経記
2	春記
1	水左記
1	永昌記
1	玉葉
3	明月記
1	吉記
1	雲州往来
1	東山往来
2	日本往生極楽記
2	大日本国法華験記
1	後拾遺往生伝
1	三外往生記
1	天台座主記
65	計

表三の示すが如く、「老少」は使用範囲といい、使用例数といい、「老若」を遥かに上回って、「年寄りと若者」という

意味分野の中心的な役割を果していることが分る。特に、「老少不定」、「男女老少」という表現は漢文という文章ジャンルで定着度が高く、慣用的な言い方となっていると見られる。

6、道俗尊卑男女老少（朝野群載435⑩）

7、爲威儀御又无益老少不定（平安遺文七2551下⑯）

一方、「男女老若」、「老若不定」という表現が見出せなかった。これは、「老少」が中国語出自の漢語で、古くから使用されているが、他方の「老若」が日本で造語された新しい二字漢語で、熟語としての歴史が浅く、「老少」ほどの熟合度が高くないことに起因するのではないと思われる。

以下、「老若」が確認された和漢混淆文に目を向けて、検討を加えてみよう。和漢混淆文の語彙は漢文訓読語、和文語、記録語及び中世以後の俗語からなると指摘されている。[2] 表二に挙げた文献のように、「老若」は漢文という文章ジャンルの古記録類にのみ用いられていることから、記録語的な性格を持っている語であるとも言えよう。「老若」が和漢混淆文に見えたのはその文章ジャンルの特徴によるものであろう。和漢混淆文に於ける「老若」は古記録類の受容で、記録語とも位置づけられよう。但し、今回調査した限りの和漢混淆文からは、「老若」が次の二例しか検出し得なかった。

1、念仏マフサルゝ老若ソノカスヲシラス（歎異抄21上165）

2、三塔九院の大衆老若も、甲冑を著し弓箭を帯して木曽に同意す。（源平盛衰記167④）

とある。この「老若」に対して、次の例のような句的形態が「年寄りと若者」という対義的な意味を表わすのに多用される。その用例数は「老若」のそれより多くなっている。

3、此ヲ見ルニ多ノ人、老タル若キトモ无ク咲ヒ合タル事无限シ（今昔物語集五58⑤）

4、ソノシマノオトコ女、ヲヒタルワカキ、魚トラムタメニ二三年ハカリホト、ヨルヒル念佛ヲシケルハミナ極樂ヘマイリニケリ（法華百座聞書抄307⑫）

とある。日本で造語された「老若」はそういう句的形態を土台に、成立したのではないかと推定される。その意味では、二例しか見えなかった、和漢混淆文に於ける「老若」はその定着度が高くないことが反映される。次に「老若」という和製漢語の成立過程について考えてみよう。まず次の例を挙げてみよう。

5、人ヲ遣テ尋ネ呼スルニ、使行テ、此讃歎ノ音ヲ聞クニ極テ貴クシテ皆、馬・牛ノ事ヲバ不問ズシテ涙ヲ流シテ此ヲ聞ク。如此シテ、男女、老タル、若キ、来集テ、此ヲ聞ク。（今昔物語集巻十一行基菩薩、学佛法導人語第二）

文中の「老タル若キ」は「年寄りと若者」という意味を示す。実は、『今昔物語集』の行基菩薩学佛法導人語という話は、平安中期頃成立の『日本往生極楽記』の第二話に基づいて構成されたのである。それを挙げてみれば、

6、令使尋呼。男女老少来覓者。聞其讃嘆之声。不問牛馬。泣而忘帰。（501⑱）

となる。両者を比較すれば、内容としてはほぼ同じであると言ってもよかろう。但し、両者には一つの注目すべき異同も存している。それは『日本往生極楽記』の「男女老少」に対して、『今昔物語集』では「男女老タル若キ」のように、「少」の代りに「若」が用いられている。又、この行基菩薩に関する話は『扶桑略記』にも見える。

7、令ニ使尋呼一。男女老少来覓者。聞ニ其讃嘆之聲一。不問ニ牛馬一。泣而忘レ帰。（天平十七年94⑮）

の如く、話の内容も『日本往生極楽記』のそれと一致しており、文中の「男女老少」も『日本往生極楽記』と同様である。

尚、『今昔物語集』の出典の一つといわれる鎮源撰の『本朝法華験記』の三種の写本、一種の版本のうちでは最も古く信頼度の高いものである高野山宝寿院蔵『日本法華験記』（仁平三（1153）年の写本）にも、行基菩薩の話が見える。

8、捨牛馬而従者殆成成数百牛馬之主有之時令使尋呼男女老少来覓（第二行基菩薩9ウ②）

話の内容は右に挙げた(5)(6)(7)と殆ど変わらない。文中の「老少」は「老少」と訓読されている。この「老少」の「少」

は「ワカキ」と訓まれるべきであろう。「少」と「ワカシ」という和訓との対応関係の成立が平安初期或いはその以降の訓点資料から看取される。例えば、

△男子女人（の）年少クシテ浄（イサ）潔（ヨ）（ク）△莊厳セルあり。（斯道文庫藏願経四分律平安初期点4/2）

△是の時に當（て）［也］士女（ワノコモヲムナモ）咸（く）に會シ少長（ワカキモヒトビト）畢（コトゴトク）ニ萃（アツマ）リ（ぬ）（石山寺本大唐西域記長寛移点四595⑧）

△少（ワカ）ウテ亦苦（ブ）老（い）テモ亦苦（ブ）（神田本白氏文集天永点三、9ウ）

とある。「少」と「ワカシ」との対応関係が確立されていることがわかる。

成立時代からも相互受容関係からも[3]『今昔物語集』の「男女老（オイ）タル若キ」の「老（オイ）タル若キ」は『日本往生極楽記』等の「男女老少」の「老少」の訓読であると判断するのが妥当であろう。但し、「老少」を「老（オイ）タル若キ」と訓読するのは右に挙げた『日本法華験記』の「老少」を「老少（モキモ）」と訓読するという過程を経て実現したと考えることが自然であろう。つまりまず「老少」の「少」を「ワカキ」と訓むことによって、「若」と「ワカシ」との対応関係が成立している前提の下で、その「ワカキ」に対して、「少」の代わりに「若」が充てられて「若キ」と成り得たのであろう。このように形成された「老（オイ）タル若キ」という句的形態は他の和製漢語の形成と同じように、それを字音読みすれば、「老若」という二字漢語となるのではないかと推定される。「若」と「ワカシ」という和訓との対応関係の成立については、後程触れることにする。

一般に、和製漢語とは仮名文において多く仮名書きされていた和語が記録体など漢字専用の文章を中心に漢字書きされるに伴って字音読みも生じ、さらに、その形が一般に定着することによって、本来の漢語と同様に認識されるようになったものを指す。[4] 例えば、「ひのこと→火事（クワジ）」、「かへりごと→返事（ヘンジ）」等は一般に良く知られる例である。[5] しかしながら、右の考察で明らかになるが如く、管見に入った仮名文においては、「老若」という和製漢語に該当するような仮名書きされる和語が見当たらなかったのである。したがって、「老若」という和製漢語の形成は、「火事」、「返事」のように仮名文において仮名書きされる和語からではなく、「火事」、「返事」等と異なった仕方を見せている。右の考察で見たように、

「老若」の形成の為には、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が成立する必要がある。そういう前提の下で、「老少」という漢語を「老タル若キ」と訓読することが初めて出来るようになる。その漢語「老少」の訓読としての「老タル若キ」を字音読みすれば、「老若」という二字漢語と成る、といった過程を経て成されたのではないか。

但し、「老若」という和製漢語の形成については、現在のところ、想定の域に止まっているのみであるため、今後、一層資料を充実させて、所論を補正したいと思う。

また、和漢混淆文では、「年寄りと若者」という対義的な意味を一語で表わすのには、「老若」と「老タル若キ」等のような句的な形態を除いては、「老少」という漢語が多く使用されている。この点では、漢文という文章ジャンルと一致している。その「老少」の例を挙げれば、次のようになっている。

9、其ノ門ノ下ニ男女ノ老少ノ人多ク居テ休ケルヲ（今昔物語集四307⑫）

10、貴賤ノシナヲエラハス老少ヲモサタメス（三宝絵詞下70オ③）

多用されている「老少」の用例の中で、「老少不定」という表現が多く存在している。それは慣用的になり、固定化されたものとなると見られる。例えば、

11、況やまた老少不定のさかひなり（発心集第五巻145⑦）

12、老少不定之習聞南門之風（延慶本平家物語第一末十オ⑨）

とある。「老少不定」という表現が固定したため、後世に編纂された『書言字考節用集』には、「老少不定」を見出し語として掲出している。

老少不定（白文集浮生都如夢亦何殊ナル）（言辞八下35⑧）

以上、和漢混淆文に於ける「年寄りと若者」という意味分野の語及び表現について検討してみた。それらが和漢混淆文での使用状況は次の表四のとおりとなる。

表四

考察対象／文献	老若	老タル(モ)若キ(モ)、若キ(モ)老タル(モ)	老少	老小
今昔物語集		3	2	1
三宝絵詞			1	
法華百座聞書抄		1		
歎異抄	1		1	
古今著聞集		1		
宝物集			2	
海道記			1	
延慶本平家物語		10	9	
日本古典文学大系(岩波)平家物語		6	9	
源平盛衰記	1	1	9	
保元物語			1	
発心集			2	
沙石集			4	
正法眼蔵			4	
正法眼蔵随聞記			2	
計	2	22	47 (18)	1

(注：( )数字は「老少不定」という慣用語の用例数を示す)

以上の考察を通して明らかになるように、「老若」は平安中期の十世紀末期ごろに漢文という文章ジャンルの中で形成された新しい語であるため、平安時代がもちろんのこと、鎌倉時代に下っても「老少」ほど多く使用されていないのである。つまり漢文と和漢混淆文に於ける「老少」は「老若」が現れていても、依然として「年寄りと若者」という意味分野の中で、中心的な役目を果している。これは「老弱」が多用される中国文献と異なった様相を呈している。

以上、「老若」が確認された文章ジャンルに限って、検討を施してみたが、以下、「老若」の使用例が認められなかっ

た文章ジャンルを見てみよう。文章ジャンルによって、「老若」の有無の異同が生じているのはその文章ジャンルの特徴に起因すると思われる。仮名文において、「老若」を見出すことが出来なかったのは仮名文が和語を中心に、漢語を最少限に使用するという文章ジャンルの制約によるのではないか。それでは、仮名文に於いて、「年寄りと若者」という意味が如何なる語或いは表現によって担われているのか、次の用例を挙げて考えてみよう。

1、つゝましくいらへにくゝておしつるおい人のいてきたるにそゆつりたまふたとしへなくさしすくしてあなかたしけなやかたはらいたきおましのさまにも侍かなみすのうちにこそわかき人〳〵はものゝほとしらぬ（源氏物語大成はし姫1526①）

2、めのとたつおい人なとはさうしにいりふしてゆふまとひしたるほとなりわかき人二三人あるはよにめてられ給ふ御ありさまをゆかしきものに思ひきこえて（同右すゑつむ花212⑨）

とある。仮名文では「年寄りと若者」という意味が右の1、2例のように示されている。但し、鎌倉時代に成立するといわれる『唐物語』、『徒然草』には、平安時代の仮名文と違ったような例が見える。

3、かゝれともわかきおひたるさためなき世のうらめしさは（唐物語第八話10③）

4、男女老少みなさる人こそよけれども（徒然草144⑧）

とある。『唐物語』は平安朝歌物語を指向しつつ、中国の説話集の翻訳ともいわれるような、平安時代の仮名文と異なった様相を有する物語である。したがって『唐物語』に「わかきおひたる」という表現が見えたのはそのためであろう。『徒然草』は平安朝の仮名文の伝統を継承しつつ、中国の古典・仏教関係の典籍等の影響の下に、『今昔物語集』以後の説話集の表現や中古以来の法制・政治・有職故実の諸文献の記録性をも吸収した随筆である。その中に現れている「老少」はほかでもなく平安時代の仮名文と違った文体的特徴の一反映ともいえよう。

仮名文に対して、漢文に於ける漢詩文は漢語を基調とする文章ジャンルである。しかし、何故漢詩文には「老若」が

見えなかったか、それについて検討してみる。漢詩文は漢文という文章ジャンルに属するものの、他の和化漢文的な古記録類と異なって概ね正格（純）漢文であるといわれている。つまり漢詩文は従来の中国の漢文、漢詩等を殆どそのまま踏襲したのである。右の考察でわかるように、中国文献には「老若」が検出出来なかったのである。したがって、漢詩文からは「老若」の使用例が確認されなかったのはそのためではないかと考えられる。さて、漢詩文では、「老若」の代わりに、如何なる語が「年寄りと若者」という意味を表わしているのか、次の用例を見よう。

1、恨（ウラミ）而更恨（ウラメシキ）莫〈恨（ウラメシキ）〉於少（ヨリワカウシサキタツ）先ニ親一雖ニ知ニ老一少之不定一（久遠寺藏本朝文粹巻十四283⑤）

2、看レ梳看レ沐看々落老少相分歎ニ兩俱一（田氏文集816下⑩）

3、老弱相携母知子（菅家文草管家後集275⑭）

4、魚行ニ人道之中一老弱没亡不レ得其死（都氏文集785④）

のように、漢詩文では、「老少」「老弱」という二語が用いられていることが明らかになる。このことは中国文献と一致する事実である。これは漢詩文という文章ジャンルの特徴を反映することにもなる。漢詩文に於ける「老少」「老弱」の使用状況は表五のとおりとなる。

表五

考察対象／文献	老少	老弱
都氏文集		2
菅家文草 菅家後集		1
久遠寺藏本朝文粹	3	
田氏文集	1	
本朝文集	2	
計	6	3

以上、日本文献に於ける「老若」を巡って検討を加えてみた。しかし、何故「老若」が日本で形成されたのかという疑問が残っている。次の項目でそれについて考えてみよう。

四、日本文献に於ける「老若」の形成について

中国文献には「老若」が見えなかったのは「老若」を形成する後部要素「若」が「ワカシ」という意味が中国語には存していないためではないかと推定された。それでは、中国語の「若」という字が「ワカシ」という意味を持っていないのに、何故、日本文献では、「年寄りと若者」という対義的な意味を一語で表す「老若」が造語されたのであろうか。それは、ほかでもなく「老若」を成す後部要素「若」が日本語では「ワカシ」という意味を持っているためであると考えられる。換言すれば、「老若」の形成は「若」と和訓「ワカシ」との対応関係が確立された上で、初めて出来たのである。「若」と「ワカシ」との対応関係の成立は次に挙げる古辞書と古文献から察知される。

若可見艹口𡕒正モシシクカクノコトシタスクナムノコトシシタカフ又工惹禾カシニタリヨシ（観智院本類聚名義抄佛下末28⑥）（声点略）

稚チワカシ幼少𡕒若（略六字）弱已上同（前田本色葉字類抄人事付上87オ③）

ワカ人ワカカタナトイヘルワカ如何ワカハ若也少也ワサカナノ反ウマカナノ反一切ノ物ノワカキハミナ気味ノヨキ也（名語記四巻二ウ）

また、昌泰年間頃成立するといわれる日本最古の漢和字書『新撰字鏡』の序文において、次のような文が書かれている。

所撰集字書敢爲若学之輩述乱簡

「若者の学者の為に、述乱簡」と解され、「若学」の「若」は「ワカシ」という意味として用いられていると判断される。文中の「若」の意味は「若」と「ワカシ」との対応関係が成立していることを物語っている。

更に、訓点資料からも「若」と「ワカシ」との対応関係の確立を伺うことが出来る。

加一復少因求法尋訪師(平)友(平)（興福寺藏大慈恩寺三藏法師傳巻九385）

文中の「少」は「ワカシ」という意味で用いられている。その「少」の字に「若也」という義注が付されていることから、「若」が「ワカシ」の意味を表すのみならず、「若」と「ワカシ」という和訓との対応関係が定まったものになっていると見られる。

さて、「若」と「ワカシ」との対応関係は一体何時代に成立したのか。以下、それについて検討してみる。まず、次の用例を挙げてみよう。

1、尓、欲レ取二其建御名方神之手一、乞帰而取者、如レ取二若葦一、搤批而投離者、即逃去（古事記上巻90⑭）

2、射ゆ鹿猪を認ぐ川辺の若草の若くありきと吾が思はなくに（日本書紀斉明紀四年）

3、吾屋戸之若木乃梅毛未含有（万葉集792）

4、夫寺家之屋者、不レ有二俗人寝處一。亦偁二若冠女一、曰二放髪丱一矣。（同右3822）

5、若草乃新手枕乎巻始而夜哉將間二八十一不在國（同右2542）

五例の「若」はいずれも「ワカシ」という意味で用いられていると思われる。したがって、「若」と「ワカシ」との対応関係が已に奈良時代に成立していたことが明らかであろう。

但し、奈良時代の『古事記』『日本書紀』『万葉集』三文献の間では、「若」という字の使用上の差異が見られる。『古事記』では、「ワカシ」を示す漢字として「稚、若」二字のみ[6]で、他の「ワカシ」を示す漢字「少、小、弱」等を見出すことが出来なかった。それは決して『古事記』においてそれらの漢字が存在していないわけではなく、各々別の意味を表すものとして用いられるためである。すなわち、「少、小」は「故随レ教少行」、「多少」「大小」、「小国」の如く、「スコシ、スクナシ、チヒサシ」の意味として使用されている。「弱」は「上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱而」のように「ヨワシ」の意味として用いる他に、慣用的な固有名詞記として「手弱女人」、「目弱王」のように用いられているのみである。つ

まり、本来の中国語として「少、小、弱」等の漢字は「ワカシ」という意味を持っているが、しかし、『古事記』においてはそれらを採用せず、「稚、若」という二字を以て、「ワカシ」を示している。それは、『古事記』の作者が「稚、若」と「少、小、弱」とを使い分けようとする意識的な用字法に起因するのではないかと思われる。更に、「稚、若」両者の間には、使用量の上で顕著な差異が存している。「稚」は二例だけあり、(7) 熟字「八稚女」の他、単字として「国稚如浮脂」と用いる。この「稚」字が本来の中国語として「ワカシ」の意味を有するため、「稚」と「ワカシ」和訓との対応関係は正しい訓関係であると考えられる。その「稚」に対して、本来の中国語として「ワカシ」の意味を持っていない「若」を用いて、「ワカシ」を示す例は106例も検出できた。右に挙げた例1のような形容詞としての例の他、神名、人名「若山咋神」、「天若日子」等、複合語の前部要素として用い、「ワカ」と訓まれる。(8) したがって、『古事記』においては、「ワカシ」を示す漢字は「若」という一字が圧倒的に多い。換言すれば、『古事記』の作者が「ワカシ」を示す為に、意識的に「若」という字を限定して用いようとする意図が認られよう。「ワカシ」を示す為に、「若」を用いようとする『古事記』作者の意識的な用字法からも奈良時代に於ける「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が已に確立していたことを指摘することが出来る。すなわち、当時、両者の対応関係が成立して、一般に知られているからこそ、『古事記』作者がそれを選択する可能となる。では、何故、『古事記』において、本来「ワカシ」の意味を持っていない「若」が「ワカシ」を示す為に圧倒的に多用されているのか。それは「古事記の文章、すなわち正格の漢文でもなく仮名文でもなく、日本語を漢字だけを使って日本語の法格を生かしつつ独自の用字法に拠って書かれた文章」(9) という性格に一因を求めることが出来よう。

『古事記』に対して、『日本書紀』では、「若」を224例検出できたが、その中に、右に挙げた例2の和歌の他、慣用的な固有名詞表記として数例「若狭」、「若櫻宮」と使用されるのみで、残りが比況、仮説等の本来の中国語と同じ意味として用いられている。「ワカシ」を示す漢字は「稚、幼、小、弱」等の本来「ワカシ」の意味を有するものが中心となり、

中国文献と一致しているところを見せている。これは、『日本書紀』が正格（純）漢文という文章の性格のため、当時、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が已に確立していても、本来の中国語として「若」が「ワカシ」の意味を持っていない以上、「若」を中国語と同じように用いたのであると看取される。同じ奈良時代文献というものの、『古事記』と『日本書紀』との両者の文章の性格によって、「若」という字の使用上において、対蹠的な差異が見られる。

同じように、『万葉集』では、右に挙げた例3、4、5の如く「若」が「ワカシ」という意味を示すのも『万葉集』の『日本書紀』と異なった日本独特の和歌集という文章の性格によるものであると思われる。つまり、「若」が「ワカシ」の意味を持っていることが以上の考察で分るように、日本語の中で発生したこととなるため、『万葉集』のような日本独特の和歌集には、当然なことながら、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が確立しているのであろう。

右に挙げた『古事記』、『日本書紀』、『万葉集』といった奈良時代の文献に於ける1～5例の示すように、「若」と「ワカシ」との対応関係が已に奈良時代に成り立っていたことが分る。そのため、奈良時代以降に成立する古辞書には、「若」に対して「ワカシ」という和訓が存しているわけである。例1の「若葦」は萌え出たばかりの葦を表す意味と考えられる。文は恰も萌え出たばかりの葦を取るように、という建御雷神の怪力の描写である。例2、5の「若草」は春に芽の萌え出したばかりの草を示すと思われる。例3の「若木」は「生えて多くの年を経ていない若き木」という意で用いると見られる。この「若木」という語は中国文献にも見出すことが出来た。

6、大荒之中有衡石山九陰山洞野之山上有赤樹青葉赤華名曰若木（山海経大荒山北経）

7、折若木以拂日兮聊逍遙以相羊（楚辞離騒）

文中の「若木」は古、日の没する所にある神木をいう。つまり、樹木の名である。中国文献には、「若木」という語が確認されたが、日本文献のように、生えてからまだ年が多く立っていない木という意味とは明白に異なっている。これは中国文献の「若」に「ワカシ」という意味が存せず、日本文献の「若」にのみ「ワカシ」という独自の意味が有ること

の反映である。また、例4の「若冠」は「若者」を示す意味と解される。が、中国文献には「若者」という意味の「若冠」は認められず、「弱冠」という語が見出される。

8、賈生矯矯、弱冠登朝（漢書100下敍傳）

文中の「弱冠」は日本文献の「若冠」と同じ「若者」の意味を表すと見られる。これは中国文献では「若」の代りに「弱」を以て「ワカシ」を示すが、日本文献では、「若」が「ワカシ」という意味を持っていることの現れである。

奈良時代の文献には、「若」という字の他「ワカシ」という意味を示し、それと対応関係が存在する「弱、少」等の字も見られる。例えば、右に挙げた例の「若草」に対して、次のように「弱草」の例も見られる。

9、弱草（ワカクサ）吾夫何怜矣（図書寮本日本書紀巻15清寧紀顕宗紀仁賢紀306）

また、「少」の字が「ワカシ」と訓まれる例は次のようである。

10、我妙少（ワカウシテ）以テ不賢（同右巻23舒明紀③）

右の二例の示すように、奈良時代では、「ワカシ」という和訓に対して「弱、少」等が充てられていることが分る。「老若」が奈良時代に見えず、十世紀末期頃になって初めて文献上に登場してくるのは、奈良時代の「ワカシ」という和訓と不特定の幾つかの漢字との間に対応関係が存していることに一因が求められよう。しかし、平安時代に入って、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が他の漢字、特に「弱」より一層緊密になるように思われる。それは先に挙げた『前田本色葉字類抄』の「ワカシ」という和訓に対しての漢字掲出の順位からも伺える。そのためか、「老若」が出現した以降、今回調査した限りの資料では、「年寄りと若者」という対義的な意味を一語で表す「老弱」が一例も確認されなかった。

何故、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係が早くも奈良時代に成立していたのにもかかわらず、「老若」という熟語が十世紀末期の平安中期ごろになって初めて文献上に現れてくるのか。色々と考えられるがまず、それは今回調査の不足によることを辞むことが出来ない。今後、資料を増して、それを考究したい。

では、以上の考察で明らかになるように、本来の中国語に於ける「若」が「ワカシ」という意味を持っていないのに、何故、日本語では「若」と「ワカシ」との対応関係が成立するのか。それは如何なる理由で、どのような過程を経て実現したのか。それについては今後の課題として考究したい。

しかし、ここでまず考えられるのは「若」と「弱」との二字が音通であることに起因するのではないか。すなわち、「弱」が「ワカシ」という意味を有しているため、「若」がそれと音通することによって、「弱」と同様に、「ワカシ」と訓まれるようになる。「弱」と「若」との音通に関しては、二項目に挙げた中国の古辞書『類篇』、『集韻』にも記述されている。「弱」と「若」との二字が音通とはいえ、「ワカシ」の意味が認められない「若」が何故、日本文献では「弱」と同じ「ワカシ」と訓まれるのか。つまり、音通以外に、他の要因がなかろうか。それに先だって、まず『康熙字典』の「弱」に関する意味記述を挙げてみよう。

弱　而勺切［集韻］［韻會］日灼切**𢀖**音若㈠尫劣也㈡委也㈢懦也㈣志気弱也㈤體猶未壯㈥柔弱也㈦跛也㈧水名也㈨衰也㈩敗也(十一)喪也(十二)良弓名也（例省略）

のように、「弱」は㈤の如く「ワカシ」という意味を示すが、「劣、懦、衰、敗、喪」等のようなマイナス的な意味の方がむしろ多く存するのである。そこで、「弱」を用いると、「ワカシ」という意味と共に、「劣、懦、衰、敗、喪」等のようなマイナス的な意味も伴って来かねないことになる。その「弱」に対して、「若」は、以上に挙げた中国の古辞書の示すように、「弱」のようなマイナス的な意味を持っておらず、「杜若」、「香草」という意味が本来「ワカシ」の示す「ワカワカシ」等の意味に近いものになるのではないかと推定される。「若」と「弱」とが音通であることを利用して、「弱」のマイナス的な意味を避ける[10]為に、同音字である「若」に対して「ワカシ」という和訓が充てられるようになったと考えられる。更に、字形から見ても、草かんむりからなる「若」という字形は「弱」より「ワカシ」という和訓の持っている意味をより一層反映することが出来るのではないかと思われる。そのため、「若」は「弱」より奈良時代から多用さ

れて、日本人の愛用文字[11]となる。それは『古事記』において、「ワカシ」という意味の「若」が106例も認められるが、「弱」が一例も見出すことが出来なかったことからも察知される。

漢字と和訓との対応関係はいつもその漢字と和訓とある意味を必ず重ねるという条件の下で、成立するものであると思われる。しかし、以上の考察によって明らかになるが如く、「若」と「ワカシ」和訓との対応関係はそれと異なった様相を呈しているのである。つまり、「若」と「ワカシ」とは、本来の漢字「若」にそれ自身の字義には関係なく、「若」と「弱」との音通を土台に、日本において「若」の字形等から独自の解釈して字義を定めて成り立ったものであると考えられる。このような訓について、新井白石が『同文通考』巻四の凡例に国訓として次のように論じられている。

国訓トイフハ、漢一字ノ中、本朝ニテ用ヒキタル義一訓、彼一国ノ字一書ニ見(ママ)ヘシ所ニ異ナルアリ。今コレヲ定メテ、国訓トハ云フ也

「若」と「ワカシ」との対応関係は、漢字の字面そのものが中国語にも見られるが、その漢字本来の字義には関係なく日本独自の意味を充てて、それによって成立したものである。因って、所謂国訓[12]であると見られる。

おわりに

以上の考察を通じて、日本文献に於ける「老若」は中国語出自の漢語ではなく、日本で造語された和製漢語であることが判明した。「老若」は和製漢語という素姓のため、日本文献では、仮名文と漢詩文という文章ジャンルに見えず、漢文の古記録類に偏して用いるといった使用上において、文章ジャンルに差異が認められた。また、和漢混淆文では、「老少」、「老小」の他には、「老(オイ)タル若キ」という句的形態が多用されて、他の文章ジャンルとの異同を見せている。「老若」は管見に及んだ資料では、十世紀末期の平安時代の中頃に現れてくる語である。その成立の新しさのためか、平安鎌倉両時代を通じて、「老若」は「老少」ほど多用されず、「年寄りと若者」という意味分野の周辺的な役割を果す。一方の

「老少」は多く用いられて、「年寄りと若者」という意味分野の中心的な語と成る。

尚、「老若」という和製漢語の形成は、日本語ではその後部要素の「若」が本来の中国語にはない「ワカシ」という意味が発生したことによって「若」と和訓「ワカシ」との対応関係が成立した上で初めて出来たのである。反対に、中国語には「老若」が確認されなかったのは、中国語に於ける「若」に「ワカシ」という意味が認められないためである。但し、今回「若」と和訓「ワカシ」との対応関係の成立についての考察は推定の域を出ることが出来なかったため、所論に不安を禁じざるをえないのである。

漢語の変遷に注目すれば、和製漢語の形成も等閑視していられない一つの課題である。「老若」の形成は日本語で造語された、少なからぬ和製漢語の一類型とも成り得えよう。今後、和製漢語の形成を考えるには、この「老若」の形成のパターンをもとにし、この「老若」のような形成に属する和製漢語を集めて、一つの語群としてそれらの共通性及び非共通性を確めることによって、一つの類型を全うさせていく。このような類型の蓄積を通じて、和製漢語の全般に迫まることが出来よう。

注

(1) 山本真吾氏「龍蹄」小考――漢語受容史研究の一問題として――（『広島大学文学部紀要』48・平成元年一月）
(2) 峰岸明氏「和漢混淆文の語彙」（『日本の説話7言葉と表現』・昭49・東京美術）
(3) 井上光貞氏『往生伝・法華験記』の文献解題――成立と特色（日本思想大系7・1974・9・25・岩波書店）
(4) 蜂谷清人氏「仮名書きから漢字書きへ」の和製漢語と和製漢字（『漢字講座4漢字と仮名』佐藤喜代治編・平成元年二月二十五日・明治書院）
(5) 山田孝雄氏『国語の中に於ける漢語の研究』（昭十五・宝文館）
(6) 小林芳規氏『古事記』の類義字一覧（日本思想大系1・1982・2・25・岩波書店）

(7) 同6
(8) 同6
(9) 小林芳規氏「古事記訓読について」(『古事記』日本思想大系1・1982・2・25・岩波書店)
(10) 瀬間正之氏「上代散文の比喩表現——「如」「若」を中心に——」(『国語と国文学』特集号、平成三年五月・東京大学国語国文学会)
(11) 中田祝夫氏『日本語の世界と日本の漢字』(1982・中央公論社)
(12) 同11

調査文献

(1)中国文献

A韻文

楚辞、毛詩(哈佛燕京学社引得)、嵇康集(嵇康集校注本)、阮籍集(阮籍上下本)、陸機詩(陸士衡注本)、陶淵明詩文索引(堀江忠道編)、謝霊運詩(謝康楽詩注本)、謝宣城詩(万有文庫本)、全漢詩索引(松浦崇編)、玉臺新詠索引(小尾郊一・高志真夫編)、全漢三国晋南北朝詩上・下(丁福保編)、張籍歌詩(張籍詩集本)、杜詩(宋刻本)、陳子昂詩(陳子昂集本)、李賀詩(李長吉歌詩四巻)、温庭筠歌詩(四部備要本)、杜牧詩(樊川詩集注本)、王維詩(趙松谷本)、李白歌詩(繆本)、白氏文集歌詩索引(平岡武夫・今井清編)、柳宗元歌集(宋世綵堂本)、孟浩然詩(四部備要本)、韓愈歌詩(廖本)、何氏歴代詩話(艾文博主編)、漢詩大観(井田書店)

B散文

論語引得・孟子引得・春秋経伝引得・爾雅引得・周易引得・荀子引得・墨子引得(以上哈佛燕京学社引得特刊)、禮記(哈佛燕京学社引得)、管子引得(中文研究資料中心研究資料叢書)、老子引得(豊島睦編)、荘子引得(弘道文化事業有限公司編)、国語索引(東方文化学院京都研究所編)、列子引得(山口義男編)、儀禮・左傳・公羊傳・穀梁傳(以上十三経注疏)、山海経通検(中法漢学研究所)、尚書(相臺本)、戦国策(土禮居仿宋本)、論衡(四部叢刊本)、淮南子・呂氏春秋(四部叢刊本)、潛夫論(四部備要本)、曹植文集(法蘭西学院漢学研究所)、史記索引・漢書索引(二十四史索引之一、之二、黄福鑾編)、後漢書語彙集成上・中・下(藤田至善編)、三国志及裴注綜合引得(哈佛燕京社引得)、文選索引(斯波六郎編)、文心雕龍索引

（岡村繁編）、貞観政要（貞観政要定本）、宋史列伝儒林巻（中華書局）、世説新語索引（高橋清編）、朱子語類口語語彙（塩見邦彦編）、資治通鑑（山名本）

C漢訳仏典

法華経一字索引付開結二経（東洋哲学研究所編）、一切経音義索引（沼本克明・池田證壽・原卓志編、古辞書音義集成19）、大正新修大蔵経索引

Dその他

佩文韻府（王雲五編）、辞源（商務印書館）、中文大辞典（中国文化研究所出版）

(2)日本文献

I奈良時代文献

古京遺文（狩谷棭齋）、続古京遺文（山田孝雄・香取秀真）、平城宮木簡一・二、藤原宮木簡、寧楽遺文上・中・下、大日本古文書（正倉院古文書（一―十五）、東大寺文書）、法華義疏（伝聖徳太子筆）、万葉集（岩波日本古典文学大系）、古事記（岩波日本思想大系）、日本書紀（岩波日本古典文学大系）、懐風藻（岩波日本古典文学大系）、風土記漢字索引（植垣節也編）

II平安鎌倉時代文献

A仮名文

竹取物語・伊勢物語・土左日記・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・夜の寝覚・狭衣物語（以上、岩波日本古典文学大系）、新訂新版かげろふ日記索引・宇津保物語本文と索引・大鏡の研究・栄花物語本文と索引。古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集・新古今和歌集・新勅撰和歌集・続古今和歌集（以上、新編国歌大観第一巻）

B漢文

文華秀麗集・菅家文章・菅家後集・日本霊異記（岩波日本古典文学大系）、遍照発揮性霊集・江都督納言願文集（六地蔵寺本）、本朝文粋（久遠寺本）、本朝続文集・朝野群載（新訂増補国史大系）、高山寺本表白集（高山寺資料叢書第二冊）、凌雲集・経国集・都氏文集・田氏家集・雑言奉和・粟田左府尚歯会詩・扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩合・殿上詩合・本朝無題詩・法性関白集（以上、群書類従第六輯）、三教指帰（天理図書館）、本朝文集（新訂増補国史大系）、日本三代実録・政事要略・類聚三代格・弘仁格・律令・今義解・延喜式・延喜交替式・貞観交替式・延暦交替式・令集解・日本紀略・扶桑略紀・百錬抄（以上新訂増補国史大系）、西宮記（増訂故実叢書）、平安遺文（一―十所収）東京堂刊行・竹内理三編）、

鎌倉遺文（一―十所収東京堂刊行・竹内理三編）、
貞信公記・九暦・御堂関白記・後二条師通記・小右記・殿暦・猪猥関白記（以上、大日本古記録）、左経記・春記・権記・水左記・中右記・帥記・永昌記・長秋記・台記・兵範記・吉記・山槐記・勘仲記・康富記・歴代宸記・花園天皇宸記・伏見天皇宸記（以上・増補史料大成）、玉葉・明月記（国書刊行会）、吾妻鏡（新訂増補国史大系）、雲州往来享禄本研究と索引・本文研究編、和泉往来（高野山西南院蔵）、高山寺本古往来・高山寺本表白集（高山寺資料叢書第二冊）東山往来・菅丞相往来・釈氏往来・十二月往来・貴嶺問答・尺素往来・雑筆往来・異制庭訓往来（以上、日本教科書大系往来編）、将門記（真福寺本・勉誠社文庫131）、玉造小町壮衰書（山内潤三・木村晟・杤尾武編輯）、最明寺本往生要集（汲古書院）、注好選（東寺蔵観智院本）、元興寺伽藍縁起・日本往生極楽記・大日本国法華経験記・続本朝往生伝・本朝神仙伝・拾遺往生伝・後拾遺往生伝・三外往生記・本朝新修往生伝（以上、岩波日本思想大系）浦島子伝・富士山記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・暮年記（以上、群書類従第六輯）

C和漢混淆文

三教指帰注（中山法華経寺蔵本）三宝絵詞（観智院本）今昔物語集・保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・平家物語（以上、岩波日本古典文学大系）法華百座聞書抄索引（小林芳規編）古本説話集総索引（山内洋一郎編）打聞集の研究と総索引（東辻保和著）歎異抄本文と索引（山田巌・木村晟編）閑居友本文及び総索引（峯岸明王朝文学研究会編）明恵上人夢記・光言句義釈聴集記・却癈記・高山寺明恵上人行状・高弁記・栂尾明恵上人傳（明恵上人資料第一、二高山寺資料叢書第一、七冊）、東関紀行本文及び総索引（江口正弘監修）、宝物集（古鈔本、小泉弘編）、方丈記・古今著聞集、沙石集（岩波日本古典文学大系）、海道記語彙及び索引（江口正弘編）、十訓抄本文と索引（泉基博編）、平家物語（延慶本）

〔付記〕

本稿は平成三年度鎌倉時代語研究集会における口頭発表をもとに加筆したものである。論を成すに際して、小林芳規先生より終始暖い御指導を賜わった。ここに記し厚く御礼を申し上げる次第である。